

## 研究ノート

## フォント Estrangelo Edessa の造形について

遠藤 太郎

## 目次

1. はじめに
2. 全般的傾向
3. D 字型のカウンター
4. C, G, S のターミナル
5. K の結合部
6. Q の字形
7. M の字形
8. ターミナルの揃えについて
9. R の字形及び結び

## 1. はじめに

本研究は、フォント Estrangelo Edessa の通常のラテン文字大文字部の造形的特長を明らかにしようとするものである。

Estrangelo Edessa は2000年に（おそらく最初のものと思われる）version0.9が発表され<sup>1</sup>、最新版は2006年発表の version5.00である<sup>2</sup>。シリア文字部分は Paul Nelson 及び George Kiraz によって作成されたが<sup>3</sup>通常のアルファベット部分に関しては不明<sup>4</sup>。小さなサイズでのディスプレイ表示用途に最適化されており、数字を含むいくつかの記号の字形は Courier に基づいている<sup>5</sup>。アラム語の方言であるシリア語が話されていた地域の名が Edessa（現在はトルコ南東部のウルファ Urfa）、最も古いシリア語の書体の呼び名が Estrangelo rounded であり<sup>6</sup>、これらが名称の由来であると考えられる。

当フォントはもともとシリア文字サポート用のフォントであるため、通常のラテン文字

部分が話題になることはあまりないと思われる。しかし以下に示す通りいくつかの注目すべき特徴が見いだせるため、本稿で取り上げた次第である。

## 2. 全般的傾向

図1に Estrangelo Edessa の通常のラテン文字大文字部全体を示す。サンセリフのシンブルな書体である。コンパクトな造形を示し、比較的ウェイトが大きく見える。

ABCDEFGHIJK  
LMNOPQRST  
UVWXYZ

図1 Estrangelo Edessa の大文字部

ABCDEFGHI  
JKLMNOPQR  
STUVWXYZ

図2 Arial の大文字部

図2に示した Arial と比較すると明瞭である。同じ程度の大ききで両者を示したが、コ

コンパクトな Estrangelo Edessa はよりポイント数が大きくなり、字画が太く見える。また K や R の形からは、基本的には幾何学的なシンプルさを重視している事が分かる。続いて字体の特性が良く表われるエレメントや文字をいくつか選んで少し詳しく考察したい。

### 3. D 字型のカウンター

B, D, P, R は D 字型のカウンター (字画によって閉じられた、あるいは半ば閉じられた空白部) を含む。多く用いられるのは上下 2 本の直線を右側の曲線で繋いだような形である (図 3)。これは「定規とコンパス」によるシンプルな作図という理念に適った形態である<sup>7</sup>。一方 Estrangelo Edessa の場合 (図 4)、上下に直線部分を置かないコンパクトで引き締まったカウンターとなっている。その分、曲線が途中で勢いをそがれることなくしなやかに伸び、ふっくらした D 字型となっている。B の下部などはかなり曲線的であり、文字全体が揺れて倒れそうなほどであ



図 3 Century Gothic のカウンター例



図 4 Estrangelo Edessa のカウンター例



図 5 Myriad Pro のカウンター例

るが、同時にまたすぐ起き上がってきそうなくらいに張りがある。D 字型のカウンターのこの弾力性に富んだ造形は Estrangelo Edessa の大きな特徴と言える。またここから、Estrangelo Edessa においては幾何学的シンプルさが絶対的なものではないことが分かる。

Estrangelo Edessa を上回るほどに弾力的なカウンターは Myriad に見られる。Myriad も Estrangelo Edessa と同様非常にコンパクトな書体であり、同一ポイントでほぼ同じ大きさとなっている。しかし字画は細く、より明るくなめらかな字体である。D 字型のカウンターははっきり分かるほどに左側で絞り込まれ、それが上昇傾向の膨らみと合わさり、かなり大きなテンションを持って縦の字画に留められていることが分かる。広く用いられ、明るく現代的な造形の Myriad であるが、P や R に注目する限り意外なほど複雑で個性的な書体であることが明らかとなる。

Estrangelo Edessa は 3 例の中で中間に位置しており、シンプルな一般性と生き生きした弾力性の両方を備えている。

### 4. C, G, S のターミナル

C, G, S のターミナル (字画の末端部) にも書体の個性が良く表われる。処理は 3 種類に大別され、水平方向もしくはそれに近い角度のラインによって止める形 (図 6 上段左)、半径方向もしくはそれに近い角度のラインによって止める形 (図 6 上段右)、そして垂直に切り落とす形である (図 6 下段)。3 番目の処理においてはターミナルに無理なくニュアンスを持たせることが可能であるため、そのニュアンスの強さによって造形が細分される (図 6 の下段右は下段左よりも強いニュアンスを持っている)。

幾何学的にシンプルなのは半径方向のラインで止める形であり、字体を明るく開放的なものとする。一方水平方向のラインで止めら



図6 C, G, Sのターミナルの造形

(上段左 Gautami, 上段右 Century Gothic,  
下段左 Estrangelo Edessa, 下段右 Verdana)

れたターミナルは字体を重く渋い、しっかりしたものとする。垂直に切り落とされたターミナルは、造形の性格としては両者の中間的なものであり、またコンパクトな書体に適している。

Estrangelo Edessa はかなりコンパクトな書体であるため、C, G, Sのターミナルは潔く垂直に切り落とした形であり、はらったようなニュアンスを軽く帯びている。

またこれらのターミナルは図1を見ると明らかのように、シンプルで力強い Estrangelo Edessa の造形に、開放性（不完全性）による明るさと耀きを加えるという重要な役割を果たしている。

## 5. Kの結合部

Kの結合部の処理は大きく分けて2種類ある。一つは右の2画を上下対称型に結合し、できた角の先端を縦の字画に触れさせるものであり(図7左)、もう一つはまず右上の字画のみを縦の字画に繋ぎ、ついで右下の字画を右上の字画に繋ぐというものである(図7中央)。

前者の処理は幾何学的なシンプルさに適い、錯視による明るい耀きを持った現代的な造形を生み出す反面、一つの文字としての一体性を非常に脆弱なものとしてしまう。一方後者の処理はまとまりのある堅固な造形を生み出す反面、字形を複雑で渋いものとしてしまう。

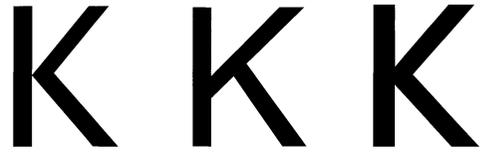


図7 Kの様々な字形

(左から Lucida Sans, Arial, Estrangelo Edessa)

Estrangelo Edessa の処理はそれらの中間と言える。右側2画を上下対称に結合させた上、できた角を縦の字画に食い込ませる、というあまり用いられないことのない処理によって<sup>8</sup>、幾何学的なシンプルさと文字としての堅固さのバランスをとっている。

## 6. Qの字形

QはKと同じように書体毎の字形の違いがはっきりしており、またK以上に多くのバリエーションを持っている。

Qの造形はまず右下に置かれるテール(しっぽ)をOに交差させるか、Oに接続させるだけかの選択によって大別される。次いでテール自体を直線とするか曲線とするか、どのような角度で置くか等の処理によって細分されていく<sup>9</sup>。



図8 Qの様々な字形

(左から Century Gothic, Arial, Verdana, Corbel, Estrangelo Edessa)

多くの場合、交差したテールは直線であり、接するだけのテールは曲線である(図8の左端の Century Gothic と中央の Verdana の処理が多く用いられているパターンである)。つまり幾何学的なシンプルさを重視したフォントではテールが交差させられる傾向にある

ということである。たしかに、Oのライン上からテールが伸びていくよりも、Oの上にもう一つ別な部品をざっくり重ねる方が一層機械的で単純な操作である。「定規とコンパス」の理想主義が比較的色濃く残る Century Gothic が代表であり、円と直線という二つの要素が明瞭に分節されている。しかし、字画が交差すれば当然それにつれて造形が複雑で渋いものになってしまう。よってQは、作成操作における幾何学的なシンプルさの追求が結果として複雑な造形をもたらすという矛盾が表われやすい、興味深い文字と言える。

では、我々が Estrangelo Edessa は Q のテールをどのように処理しているであろうか。ここでも Estrangelo Edessa は代表的な2種類の処理(直線テールの交差 or 曲線テールの接続)の中間の道を行っている、つまり直線的なテールをOに接続しているのである<sup>10</sup>。それにより結果としての造形のシンプルさを確保している。また接続の位置は、テールの左側輪郭とOの外側輪郭の作る角度があまり大きくならないよう調整され、両者の独立性を守っている(角度が大きすぎればテールがOの接線のようになり両者の独立性がそこなわれる)。こうして Estrangelo Edessa は Q の字形において、シンプルさと明瞭な分節とのバランスをとっているのである。

## 7. Mの字形

Mの字形は3種類に大別される。両側の字画を垂直に立て、中央の谷を底まで落とす形(図9左)、両側の字画を垂直に保ったまま谷を底まで落とさない形(図9中央)、両側の字画を少し開いて谷を底まで落とす形(図9右)である。

最初のものが最も単純な形であるが、この字形には大きな問題がある。つまり、全体に占める中央の谷型のカウンターの割合が非常に大きく、文字としての一体性がそこなわれ



図9 Mの様々な字形

(左から Arial, Verdana, Estrangelo Edessa)

てしまうという問題である。この問題を回避するために用いられるのが、谷を底まで落とさない、あるいは両側の字画を広げて2つの山形のカウンターを大きくする、という2番目3番目の字形に用いられている手法である。2つの手法とも単純さを犠牲にするものであるため、わざわざ2つ合わせて用いられることはない<sup>11</sup>。

Estrangelo Edessa では両側の字画を広げる手法が用いられ、一つの文字としてのまとまりが高められている。なお、コンパクトな Estrangelo Edessa で M の幅を広げる手法が用いられているのには疑問も感じられるが、この点については後で解明を試みたい。

## 8. ターミナルの揃えについて

E, F, Gには、お互いに長さを揃えることも、揃えないままにすることも可能な要素が2~3本含まれている。Eにおける3本の水平の字画の右端、Fにおける2本の水平の字画の右端、Gにおける上右端とアーム(下右部の垂直線)の右側輪郭である。



図10 E, F, Gの様々な字形

(左から Myriad Pro, Verdana, Estrangelo Edessa)

多くのフォントではそれぞれの要素が独自な位置で止められている(図10左では全てが揃わないままに置かれている)。また、Eや

Gの右端が切りそろえられている場合でも、Fの2本の水平線の長さには差が付けられている(図10中央)。それに対してEstrangelo Edessaでは全てが右端で切りそろえられ、単純さが最優先されている<sup>12</sup>。

この処理は幾何学的なシンプルさをもたらしているのであるが、同時にEstrangelo Edessaの字体に幾何学的な意味ではないシンプルさ、つまり竹を割ったような真っ直ぐさや気取らない素朴さ、木訥とした若々しさを与えることにも寄与している。

また前節の疑問に戻るなら、Mの谷を途中で止める手法をとらせなかった原因は、このような切り揃えによる単純さへの傾向ではないかと考えられるのである。

## 9. Rの字形及び結び

最後にRの字形をもう一度確認したい。

先ほどD字型のカウンターの形を問題にした際に触れたRであるが、文字単体として見れば右下の頬杖の造形が最も重要なポイントである。直線のものとは曲線のものがあり、多くの場合D字型のカウンターの横幅の狭い時には直線が、広い時には曲線が用いられ、直線の頬杖は左側の縦の字画に近い位置でDに接続され、曲線の頬杖は離れた位置で接続し、Dの下辺と合流する。図11の中ではMyriadが例外的な造形を施されており、D字型のカウンターの幅が狭いコンパクトな字体にもかかわらず曲線的な頬杖が用いられているため、かなりの急傾斜で滑り降り、着地直前に少し緩められている。



図11 Rの様々な字形

(左からEstrangelo Edessa, Century Gothic, Verdana, Myriad Pro, Gisha, Arial)

Dを柔らかく持ち上げる曲線の頬杖とは異なり、Estrangelo Edessaにおいては、同じサイズで<sup>13</sup>比較すると他よりかなり力強く見える頬杖が、あまり大きくないDを固くしっかりと支えている。Century Gothicの、縦の字画にかなり近い位置で接続された頬杖の上で大きなDが不安定に見えているのとは対照的であり、また、同じ休めのポーズをとりながら、あまりに大きく脚を投げ出しているVerdanaとも異なり、緊張感のある姿勢を保っている。しかし強ばっているわけではなく、張りのあるカウンターを若々しくしなやかに支えている。

このRの文字を含むPからSまでは、Estrangelo Edessaの性格を特に良く表しているエリアといえる。

☆

以上、Estrangelo Edessaのラテン文字大文字部の造形に検討を加えてきた。そして、当フォントの性格の一端を、幾何学的な単純さや一般性と弾力的な生氣、まとまりのある強さと明るい耀き、素朴さとしなやかさ等、相反する、しかしそのいずれをも捨てたくはない諸目標の間でバランスをとった若々しい書体である、として説明できるというのが本稿の結論である。

<sup>1</sup> <http://www.microsoft.com/typography/fonts/font.aspx?FMID=1478>参照。

<sup>2</sup> <http://www.microsoft.com/typography/fonts/font.aspx?FMID=1565>参照。

<sup>3</sup> <http://www.microsoft.com/typography/fonts/family.aspx?FID=236>参照。

<sup>4</sup> コピーライトはSyriac Computing Institute。注1, 2のサイトを参照。

<sup>5</sup> <http://www.microsoft.com/typography/fonts/family.aspx?FID=236>参照。

<sup>6</sup> <http://www.bethmardutho.org/aboutsyriac/>を参照。

<sup>7</sup> もちろんこれは理念の問題であり、実際のデザインが定規とコンパスによっておこなわれるということではない。

- <sup>8</sup> Century Gothic ではより極端な形で用いられている。
- <sup>9</sup> なお, Avant Garde においては交差したテールの左端を延長して内側からもう一度 O に接続させるという処理がなされている。
- <sup>10</sup> 同じような処理は Frutiger や Optima にも用いられている。ただしそれらのテールはより強いニュアンスを持っている。
- <sup>11</sup> 意外にも Century Gothic で両側の字画を広げる手法が用いられている。山や谷の頂点の角がとがっていることと合わせ, 生気を感じられる部分である。
- <sup>12</sup> 同じような切り揃えは Century Gothic, Avant Garde 等に見られる。
- <sup>13</sup> 同じポイント数ではなく。